週刊 高齢者住宅新聞
―介護、ビジネスの未来を創る―
Elderly Press Newspaper

2021年（令和3年）
3月17日
第621号（毎週水曜日発行）

（株）高齢者住宅新聞社
〒104-0061
東京都中央区銀座8-12-15
☎03-3543-6852（編集部）
発行人 網谷敏数
年間購読料 23,100円（送料込・税込）
ホームページ
https://koureisha-jutaku.com

ヘルスケアフォーカス

10分毎にバイタル自動測定

業務効率化やコロナ対策

メディカル・ケア・プランニング

グループホームやサービス付き高齢者向け住宅運営のメディカル・ケア・プランニング（東京都江戸川区）は、サ高住「ハーモニーライフ飯能」においてリストバンド型のバイタルチェック機器を約3ヵ月間試験運用。業務効率化による個別ケア提供時間の増加、またコロナ対策に有効と判断。本格導入を決定した。

試験運用に用いられた機器はヘルスケアベンチャーのバイタルDX社（東京都新宿区）が開発した「VDXヘルスケア」。

体温、血圧、脈拍、SPO2管理

この製品は、体温、血圧、脈拍、SPO2を自動で計測・収集する軽量なスマートウォッチと、そのデータを吸い上げる通信機能がついたゲートウェイ、そしてバイタル情報を一元管理するクラウドシステムで構築されている。

装着したスマートウォッチが10分間隔でバイタルを自動計測。収集されたデータはBluetoothでゲートウェイと連携し、クラウドシステムに蓄積される。バイタルデータは個人・フロアごとなどパソコンやスマートフォンに一覧表示される仕組みだ。スマートウォッチは防水のため入浴時の利用も可能。また、外した時間の把握もできる。

▶軽量なスマートウォッチ

▶ゲートウェイ

今回、試験運用を実施したハーモニーライフ飯能は定員60名のサ高住（特定施設入居者生活介護）。運用はまず8人の入居者で行った。

作業時間減らし 個別ケアが増加

光山亮二施設長は「入居者全員のバイタルを取るだけでスタッフ3名が30～40分かけていた」と話す。早朝に看護師を含めバイタル確認に時間を取られることになるが、ゆっくりと会話ができるほどの余裕はなくただの「作業」になりがち。さらに居室に出向いても入居者がトイレで不在だったり、計測後に温度版に転記したりと、非効率な運用が続いていた。

一方で、VDXヘルスケアを装着した入居者8名についてはスマートウォッチがバイタルを自動計測するため、この時間がなくなりスタッフが個別ケアに入り会話を交わす時間が増えたという。

「入居者への個別ケアは介護が好きなスタッフが一番望むこと。非効率な作業時間を減らすことがスタッフのモチベーション向上、離職防止にも繋がるのではないか」（光山施設長）

医師との共有で 看取り期活用も

「終末期の入居者にスマートウォッチを装着してもらいデータを医師と共有することで、看取りへの対策が進めやすくなる」（山田社長）

使い方も腕に装着するだけと難しい操作がなくスタッフからは好評。試験に協力した入居者からも特に不快だという声は出ていないという。もちろん認知症の人など全員が装着を続けてくれるとは限らないが、腕時計に慣れた世代でもあり装着に嫌悪感を感じることは少ないようだ。

しきい値、グラフで視覚的に

VDXヘルスケアの試験運用を始めた理由について山田一幸社長は、コロナの感染対策を挙げる。

「クラスターが発生すれば多くの入居者の命を危険にさらす。SPO2を始めリアルタイムで連続的にバイタルを見える化することで感染初期の早い段階でリスクを把握できるのではないかと考えた」（山田社長）

入居者だけではなくスタッフや家族などにも装着してもらい、2週間分のバイタル情報から就業、面会の可否などの判定ができれば、感染リスクをさらに軽減できる。また、今後の本格導入については、「スマートウォッチなどのデバイス自体は真新しいもではない。導入を検討できるコストになってきたからだ」（山田社長）

大手メーカーのスマートウォッチではオーバースペックで、かつそれ自体に通信機能があるとコストが高くなり施設での利用は現実的ではない。

バイタルDX社はVDXヘルスケアを5月に発売するが、スマートウォッチ20台、ゲートウェイ1台の購入とシステム利用料で60万円。2年目からは月額1万5000円のシステム利用料のみとなる。